AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2016.10) 平成27年度:10.

余命や病状の告知を望まなかった終末期にある癌患者の家族の思いと看護支援

河上 里紗, 伊東 里紗, 新妻 詩織

余命や病状の告知を望まなかった終末期にある癌患者の家族の思いと看護支援

旭川医科大学病院 6 階西ナースステーション
○河上里紗，伊東里紗，新妻詩織

【目的】未告知の終末期にあるがん患者の家族の一事例から家族の思いを明らかにし，終末期にあるがん患者の家族が悔いなく患者と関われるための看護支援を検討する。

【研究方法】

1.研究期間：平成 26 年 7 月～12 月

2.研究対象：終末期にある入院患者の家族 1 事例。入院期間は 52 日間であった。

3.データの収集および分析方法：対象患者の看護記録から家族の気持ちや言動に関する記録を抽出し，コード化し，内容の類似性によってカテゴリー化した。

【倫理的配慮】データはコード化し，ロック機能のある USB に保存し鍵のかかる場所で管理する。研究で得られたデータは本研究の目的以外に使用せず，個人が特定される情報を使用しない。本研究は研究者の所属する機関の倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】1.研究対象者の概要

60 代男性(消化器癌 StageⅣ)の家族。今まで化学療法を繰り返してきたが，予後 1 か月程度である事が家族のみに告知されていた。予後告知に対する患者の発言は看護記録からは得られなかった。

2.分析の結果, 103 のコードと 10 のカテゴリーに分類した。カテゴリーは,【患者のデータ・病状を知りたい】,【予後や病状を患者に悟られたくない】,【告知した方が良いのではないか】,【清潔を保持してほしい】,【患者らしくいてほしい】,【患者を安楽にしたい】,【患者のそばにいたい】,【ケアに参加したい】,【家族水入らずの時間を作りたい】,【患者との思い出を語りたい】であった。

【考察】【患者のデータ・病状を知りたい】という思いは【予後や病状を患者に悟られたくない】という思いから患者と関わる為に心の準備をする必要があった為に生じたと考えられる。家族は予後を【告知した方が良いのではないか】という葛藤があったが，気力を失わず今までと同様に前向きな姿でいてほしいというような【患者らしくいてほしい】という思いから未告知を選択したと考える。【清潔を保持してほしい】という要望も【患者らしくいてほしい】思いから生じていたと考える。また，家族は【患者を安楽にしたい】という思いと麻薬などを用いることで患者らしさが失われることを危惧していた。しかし，本人から苦痛の緩和の希望があり，家族と話し合い，麻薬を使用することとなった。その後も家族が考える患者らしさが失われることはなかった。死にゆくがん患者と家族員との相互作用について，庄村らは「互いに真実に触れないことが精神的危機を回避する正の作用をもたらしている」と述べており，この事例でも正の作用が生じ,安定が生まれたと考える。家族が【患者らしくいてほしい】という思いを満たすことが出来，患者との家族関係を維持出来たことが安心感や達成感に繋がり，後悔を多く残すことがなかった。だからこそ,【患者のそばに居たい】【家族水入らずの時間をつくりたい】【ケアに参加したい】【患者との思い出を語りたい】という思いが生じたと考える。看護師が家族の頑張りを労い，家族のケアが間違っていないことを保障する声掛けを行ったことにより，家族は今まで行ってきた選択に自信を持ち，後悔を残さなかった。一般的に患者に告知を行うことが推奨されているが，告知するか否かではなく，どちらを選択したとしても，その選択に家族が納得し後悔を多く残さないためのケアを行っていくことが重要であると考える。

【結論】

1. 未告知の終末期にあるがん患者の家族は,【患者らしくいてほしい】という思いを中心として様々な思いや葛藤を抱いている事が分かった。

2. 看護師は家族の葛藤の過程を支え，その過程の中で決定した選択を支持することが重要である。